

加齢なる挑戦

3月6日、いよいよ**合格者発表**。検定の出来具合を考えて、合格は難しいだろうと考えていた。氏名の上段から見始めて見あたらず、やはりだめかなと思い始めた一瞬、河村さんが「今井さん、あるよ。」と大きな声で教えてくださった。確かに、合格者一覧の最下段、7番目にあった。我が目を疑い、掲示板をのぞき込んだ。

握手を交わしながら、河村さんはわがことのように喜んでくれた。もちろん彼は合格だ。この受検期間中互いに情報交換したり励まし合った受検仲間たちとも喜びを分かち合った。今年は受検者8名。これまでにない少なさだ。たった一人の不合格の人のことを考えるとなんだか申し訳ない思いが胸中をよぎった。私は本当に幸運だった。

クラブ入会の年、3シーズン前にさかのぼる。いきなり「準指を受検したいのですが・・・。」居並ぶ役員さんの前で申し出た。唐突ともいえる話だったが皆さんは親身になって助言下さった。「認定指導員を目指したら如何ですか。」谷浦会長の一言だった。

結局、その年4人の受検組レッスン(養成講習)に参加させていただくことになった。このいきさつが無かったら今日の日は無かったと思っている。これが準指導員受検への始まりだった。

この年からスキー教程が変わり、私はとまどいの中、八方尾根を皮切りに養成レッスンに参加した。

今も**会長の基礎スキー**の手ほどきが鮮烈に記憶に残る。ニュートラルポジション、山回りと谷回り、斜滑降、横滑り、プルーク、基礎パラレルを系統的に学んだ。滑りはじめのポジションから滑走中の姿勢、体のバランスとハンドワークには何度も何度も繰り返しの連続だった。実技を見せて理論で裏打ちする会長のスキー技術に対する徹底した追究心と情熱にスキーマンの姿を見せていただいた。その後、3シーズンもの間、ことあるごとにご指導いただいた。会長の言葉に「教えてもらうだけでは進歩はない。自分から工夫と練習の積み重ねが最も大切だ。」といわれたことが今も心に刻み込まれている。

指導員資格をめざす人には間違いなく特別な思い(動機)があると思う。年長ならば人生の背景みたいなものかもしれない。諸先輩方の思いを思い巡る一方、なぜ私はこれまで固執しているのか。自身に問いただしてみたことがある。小学校教師だった私は、子どもたちと滑りたい。スキーを学びたい人がいればうまくなって教えてたい。このことが原点だった。

61才、2級検定合格、63才、シニア1級検定合格、65才クラブ入会、68才準指受検

遅いスタート故に、クラブ入会が大きな支えだった。いよいよ、受検に臨むにあたって、一度だけ挑戦させてほしいと会長に嘆願にも似た気持ちをお伝えし、受検に承諾していただいた。一発勝負の思いだった。

結果、加齢配点のお陰か、幸運にも合格をいただいた。とりもなおさず、クラブの皆さんにはお礼の言葉が見つからないほどのご助言と指導をいただいた。どなたもが懇切丁寧に、そしてフレンドリーに。金沢スキークラブが大切にしてこられたクラブイズムが根底にあるからに違いありません。

来シーズンは69才になる。こんな年齢の私だがこのクラブイズムを引き継いで少しでもお役に立ちたいと思っている。

今井 大介